

## はじめに

全身全霊で叫びあげる人々の声が束となって空間を埋め尽くす。

そんなコーラスへの私の初恋は、ある風変わりな中高一貫校に通っていたときでした。その学校は今では星野源やハナレグミ、物理学者の石原安野などを輩出したことや、マイナースポーツ「カバディ」の名門としても知られています。

この学校では、ピアノを中心にコの字形に並んだ個性あふれる1000人もの地声がハーモニーを作り、時にオタクとヤンキーさえもが肩を組んで歌うのです。誰ともうまくやれず保健室に1年中こもっていた小さな私も、ただ彼らと同じ歌を知っているというだけで、人の輪の一部となりました。

私にとってコーラス音楽とは何百時間もの修練を重ねて追い求める芸術活動ではなく、それぞれ違う人生から集まる人々が自然発生的に歌うからこそ力を持ち、美しいものでした。歌っているさなかで、たぶん天国というのはこういう場所なのだろうとさえ思えたのです。

あの初恋を追いかけ続けることで私は音楽大学で学び、その後黒人教会という場所に20年以上身を置き、さまざまなコーラスワークに携わっていくこととなりました。

オックスフォード大学の研究チームが近年、クワイアー（合唱グループ）で歌うことが、鎮痛作用のある $\beta$ -エンドルフィン、気力を支えるドーパミン、精神を安定させるセロトニンなどの脳内物質の分泌を促すことをレポートしています（University of Oxford Research: Choir singing improves health,happiness）。著名人の違法薬物問題がニュースから尽きることはあり

ませんが、コーラスで得られる脳内化学反応による満足感は、違法薬物によるものなどよりもはるかに効果的で安全なものだということです。

さらに、2016年にはイギリスの王立研究機関が、クワイアーで歌った前と後でガン患者の免疫細胞の数が劇的に増加することを報告しています (ScienceDaily 誌 2016年4月4日「CHOIR SINGING BOOSTS IMMUNE SYSTEM ACTIVITY IN CANCER PATIENTS AND CARERS, STUDY SHOWS」)。

そんな脳や体の構造を持つということは、人類はもしや、その発生当初から「ともに歌う」という活動を必要としている種族なのではないでしょうか。そんな仮説を支えてくれる研究もあります。

ゴリラ研究家にして京都大学総長(2020年現在)である山極寿一氏は、その著書『「サル化」する人間社会』(集英社インターナショナル 2014年)の中で、ゴリラの歌について論じています。ニシローランドゴリラの社会は個体同士が離れて行動することが多いのですが、彼らは、個体同士が密集して生活する他の種のゴリラよりもよく歌うそうです。離れていてもある種の「音」を仲間と共有することで、例えば、赤ちゃんを安心させるという役割をコミュニティ全体で担うことができ、それが言語コミュニケーションの最初の姿であったのではないかと、このように述べています。

その進化形として、と言えるでしょうか、野生のごとく喉の機能をフル活用しコミュニティ全体で歌ういわば「地声コーラス」は、世界の多くの(あるいはすべての)民族がその歴史のはじめから持っています。しかしそれらはさまざまな理由で、いくらかの民族からは失われました。日本では戦後教育が西洋化してゆく中で、民謡など多くの伝統文化が教育現場から姿を消しました。また、だんだんと豊かになってゆく生活の中で、人がともに歌う文

化の重要性が忘れられていったのかもしれませんが。コーラスで歌わなくても、カフェインやアルコールや、テレビなどの視覚刺激での脳内の変化を期待しやすくなったからでしょうか。

しかし地上に数ある民族の中でも、近代まで凄惨な歴史を強いられた「アメリカの黒人」こそは、絶望を生き抜く必要のために、集まってともに歌う地声コーラスの文化を力強く受け継いできました。残酷な1日や未来を忘れ生きる力をつなぐために彼らに許されたほぼ唯一のツールが、ともに集まって歌い、踊ることだったのでしょ

う。そうして図らずも生まれた凄まじいコーラスの伝統は、特にゴスペルミュージックという宗教音楽に現在まで引き継がれています。しかもアメリカ音楽市場の先端のサウンドを常に取り込み、斬新な創造に満ち満ちながら、ビルボードヒットチャートの一ジャンルとしてのたゆまぬ発展も続けているのです。

そのゴスペルミュージックが、90年代の映画『天使にラブ・ソングを…』シリーズをきっかけに日本にやってきたとき、そのサウンドはまさに、私たちがこの国で失くした地声コーラスの夢を再び見せてくれました。人々は日常から解放されて高らかに歌う時間のために、各地で開かれる講座やクラスに足を運んだのです。

しかしブームは長くは続きませんでした。より本物を求める真摯な指導者や本職のミュージシャンの多くが、この音楽の階段が自分の精神性とは違う宗教活動に続いていることに（そしてそこにしか続いていないことに）早々に気づいたのです。こうして専門家たちはこの音楽に深く踏み込むことに及び腰になり、指導者の指導力やチームの音楽性は伸び悩み、そのコンサート

の質はせいぜい「知人や家族が出ているから聞きにゆく」程度のレベルにとどまることになったのです。当然リスナーは失われ、市場は縮小の一途となりました。

私たちの国は再び地声コーラスの夢を失うのでしょうか。

いえ、この音楽の喜びを一度知った魂たちがその憧れを完全に失うことはないはずです。だからこそ今この国には、ゴスペルを愛しながらゴスペルを追い続けられない、悩める「ゴスペル難民」たちが発生しているのです。

本書が目指しているのは、これまで日本のゴスペル市場で何度か試みられた、宗教色を薄めた趣味の推薦書としてのゴスペル解説でも、クリスチャン目線での宗教への誘いとしてのゴスペル解説でもありません。

本書が目指すのは皆様に、人の命とアメリカ黒人音楽史が紡いだこのコーラスの関わりについて、現場、歴史、音楽的構造まで含めて、いくらかの専門家になっていただくことです。

そうして、この音楽の感動を心おきなく追いかけることへの希望を持っていただけることです。

一度は憧れながらゴスペルとの関わり方を迷っていらっしゃる方々にとっても、新たにこのコーラスの魅力に触れる方々にとっても、そして指導や音楽療法をなさる方にとっても、その情報源、資料として正確で有用なものとなり、希望となるものであることを、本書は期しています。

本書ではまずゴスペルを正確に知り、次いで、この国の私たちがこのサウンドにみる夢がなんなのかについて、より明確な問いかけをしてゆきます。

本書を通じ、私のあの日の初恋の情熱のように、現代から過去へ、そして未来への「命のコーラス」の旅を皆様に楽しんでいただけることを、心より願っています。